

中国における知的障害教育カリキュラムに関する文献的検討

—学校ベースカリキュラムの現状と課題—

○裴 虹 米田宏樹

(筑波大学人間系)

KEY WORDS : 知的障害教育 カリキュラム 中国

I. 目的

中国における知的障害教育カリキュラムは、1980年代から今日まで、①通常小中学校の教材をそのまま使用、②全国で統一的に編集された教材の使用、③知的障害特別支援学校（中国では培智学校と呼ぶ、以下、培智学校）は自ら開発した学校ベースカリキュラムの使用、④培智学校の義務教育カリキュラム基準（2016年版）に基づくカリキュラムと学校ベースカリキュラムの総合的併用という4段階を経て発展してきた。特に、培智学校教育対象が、軽度知的障害から、中重度知的障害、自閉症や脳性麻痺などを合わせ有する多様な障害へ変化し、通常の小中学校の教育カリキュラムをそのまま適用したり、知的障害の単一障害型教育カリキュラムを適用することなどが不適切であることが明らかになった（傅・莫・肖, 2016）。このような状況を受けて、多様な教育対象に対応でき、学校や地域の特色に応じる学校レベルのカリキュラムが開発・実践され始めた（郁, 2005）。

そこで、本研究では、中国における知的障害教育カリキュラムに関する文献を収集し、特に、学校レベルのカリキュラム（学校ベースカリキュラム）に関する研究を概観し、学校ベースカリキュラムの現状と課題を明らかにすることを目的とした。

II. 方法

1. 文献検索・収集方法

中国知網（www.cnki.net）にて、「培智学校（知的障害特別支援学校）」「知的障害」「弱智児童（知的障害児）」「課程」をキーワードにして検索を行い（例：培智学校＋課程）、中国における知的障害教育カリキュラムに関する学術論文を選定した。その後、選定された文献を精読し、本研究に関連が認められない文献を除外し、計57件を知的障害カリキュラムに関する対象文献とした。文献は、1998年から2020年までに刊行されたものであった。

2. 学校レベルのカリキュラム研究への焦点化と分析の観点

対象文献57件のうち学校レベルのカリキュラムについて取り上げた文献が20件と最も多かった。これら20件のうち、学校全体でのカリキュラムマネジメントを取り上げた14件の文献を抽出し、学校ベースカリキュラムの①意義、②理念と目標、③内容と開発形態、④問題と課題の各観点について整理した。

III. 結果

学校ベースカリキュラムの20件文献のうち、著者の所属から分類すると、大学教員であるものが10件、培智学校教員であるものが10であった。また、研究範囲から分類すると、学校ベースカリキュラム全体に関する研究が上述の通り14件、カリキュラムの1側面に焦点を当てた研究が6件であった。これらの1側面的研究は、社会参加、情報技術、リハビリ・機能訓練、社会適応、職業教育、労働技能に関するカリキュラム開発と実施であった。

Table 1は、全体的研究の14件について、各観点で整理した結果の概要を示したものである。

知的障害教育の意義は、主に生徒の発達の多様性を尊重し、知的障害のある生徒の生きる力と成長発達ニーズを満たすことにあるととらえられていた。

学校ベースカリキュラムは、「児童生徒を基本とする」や「生活即教育」などでその理念が表され、すべての児童生徒の成

長・発達と生きる力の育成が目標とされていた。

カリキュラムの内容と開発形態についてみると、内容と開発形態は、各学校において、さまざまであるが、教科知識の強調から、生活化、適応性、統合性重視の方向性に変化していることが確認された。

学校ベースカリキュラムの課題は、学校内での一貫したカリキュラム開発体制が欠如していることや学校間の協力と共有意識が希薄であることなどが挙げられた。また、研究事態が実践研究に集中し、理論研究が不足している点が挙げられた。

IV. 考察

中国における知的障害教育カリキュラムの研究は様々な視点から行われ、学校レベルのカリキュラムと新カリキュラム基準の解釈を中心に展開してきた傾向がみられた。培智学校は学校レベルのカリキュラム開発を重視しており、自ら研究開発したり、他校のカリキュラムモデルを参考して開発したりしている。学校レベルのカリキュラムの教育理念と目標は基本的同じであり、構成や形態などは異なるが、内容の重複は多く、特色が明確ではないという現状が明らかになった。今後、既存のカリキュラム資源の統合、特色があるカリキュラムの開発、既存の校内外のカリキュラム資源を充分利用した上で、学校と地域の長所を活用し、1つの側面に絞って学校の特色であるカリキュラムを開発することが必要である。また、大学教員の文献はほとんど調査研究である一方、現場教員の文献はほとんど実践研究であり、研究の質が高くない現状であった。今後、大学教員と現場教員は共同研究を行い、より高い質、実施しやすいカリキュラムの開発・研究を望ましい。

V. 引用文献

傅王倩・莫琳琳・肖非（2016）从“知识学习”走向“完满生活”——我国培智学校课程改革价值取向的变迁. 中国特殊教育, 6, 32-37. （表題の日本語訳：「知識学習」から「充実する生活」へ——我が国培智学校カリキュラム改革の価値観の変遷）
郁松華（2005）培智学校校本课程开发的类型分析. 中国特殊教育, 10, 47-49. （表題の日本語訳：培智学校における学校ベースカリキュラム開発タイプに対する分析）

（付記）本研究はJSPS 科研費 18H01037 の助成を受けた。
(Hong PEI, Hiroki YONEDA)

Table 1. 学校ベースカリキュラム研究論文の記述内容の観点別整理結果の概要

意義	①生徒の発達の多様性を尊重し、知的障害のある生徒の生きる力と成長発達ニーズを満たす。 ②特殊教育における教師の専門性の向上を促進する。 ③学校の発展を促進し、培智学校の学校運営の特色を表す。 ④国家ベースカリキュラムを踏まえるが、学校ベースカリキュラムを重視・優先する。
理念と目標	理念：①生活力、生きる力、生命力を養う「生活即教育」という理念。 ②「生活で発展し、生活に奉仕する」、すべては児童生徒の生きる力の育つと成長発達のための「児童生徒を基本とする」という理念。 目標：①社会に踏み出し、社会へ溶け込み、社会生活に適応する人をつつ。 ②日常生活の知識とスキルを獲得し、社会生活に適応し、自立的生きていくことができ、生活の質を高めることを目指す。 ③自立的な生活ができ、持続的成長発達ができる人をつつ。 ④児童生徒の潜在力の発展、弱さを克服、自信の育成、全面的発展を目指す。
内容と開発形態	内容：生きる力を養う教育課程、6大領域課程、10大領域課程、3大プラットフォーム課程、4大モジュール特色課程などである。テーマに沿った活動で領域を統合し、課程内容を生活上のテーマに沿った単元学習活動に取り組み。 形態：全体的カリキュラム開発、部分的カリキュラム開発、既存のカリキュラムを改訂、他校のカリキュラムの良い部分の自校のカリキュラムへの組み入れ。
問題と課題	①学校内での一貫したカリキュラム開発体制が欠如している。 ②各学校が開発したカリキュラムの内容が重複している。 ③カリキュラム開発における協力と共有意識が希薄で、特色が明確ではない。 ④教師の専門性が高くないため、カリキュラム開発に影響がある。 ⑤カリキュラム開発の研究成果が少なく、質が高くない。 ⑥研究が実践に集中し理論に関する研究が不足している。 ⑦海外における学校ベースカリキュラムの研究のレビューがほとんどない。